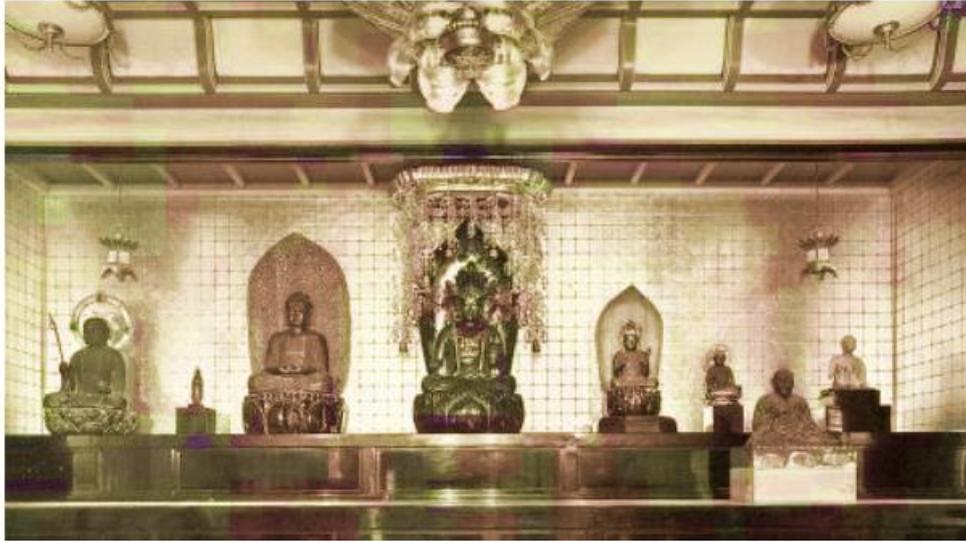


# “白山”と“十一面観音”と“生命の樹” 神とは？

2023.2.11 建国記念日、自身の故郷白山麓白峰にある“林西寺”を訪れました^^

明治期の神仏分離・<sup>はいぶつきしゃく</sup>廃仏毀釈により、白山より降ろされたとされる、“下山仏 8 体”が祀られています



(写真撮影禁止の為、県の Web ページよりお借りました。↑ 現在と少し配置が違っているようです。2014 年5月掲載)

(今は、こんな感じ↓だったような… 泰澄大師像は?)



気になっていたながらも、なかなか訪れる事ができなかった場所。。。“今が、その時”?!

本堂の左手にある一室に通され、イスに座ると、下山仏についての案内テープが流れてきました

ずらりと並ぶ仏様を前に、一人、静かに過ごすひと時は、もの凄く貴重で、とびきり贅沢な瞬間だったのでは？

と、いつも後になってから思う…もっとなんとしてればよかった？(笑)、地上セルフです

(一番上の写真の)

向かって右から二番目、手前に鎮座しますが、白山開山の祖と言われる“**泰澄大師**”座像です

(以下白山比咩神社 Web ページより抜粋)

長い間、人が足を踏み入れることを許さなかった白山に、はじめて登拝(とはいしたのが僧泰澄です。

泰澄は、天武天皇 11 年(682)に、越前(現在の福井県)麻生津(あそうず)に生まれました。幼いころより神童の誉れ高く、14 歳のとき、夢で十一面観音のお告げを受け、故郷の越知山(おちざん)にこもって修行にあけくれるようになりました。

霊亀 2 年(716)、泰澄は夢で、虚空から現われた女神に、「白山に来たれ」と呼びかけられます。

お告げを信じた泰澄は、それまで誰も成し遂げられなかった白山登拝を決意し、弟子とともに白山を目指して旅立ちました。

そして幾多の困難の末、ついに山頂に到達。養老元年(717)、泰澄 36 歳のときでした。

白山の開山以来、泰澄の名声はとみに高まり、都に赴き元正天皇の病を祈祷で治したり、大流行した天然痘を鎮めるなど、華々しい活躍をします。開山から 8 年後の神亀 2 年(725)には、白山山頂で奈良時代を代表する名僧行基と出会い、極楽での再会を約束したとも伝えられています。

数々の伝説を残し、「越(こし)の大徳」と讃えられた泰澄は、神護景雲元年(767)に越知山で遷化。享年 86 歳でした。

(泰澄大師は、弘法大師空海と同じ真言宗ですが、実在を疑問視される、謎多き人物との事です)

自身の生家は浄土真宗なので、仏教と言えば「南無阿弥陀仏」「親鸞聖人」のイメージ^^

“泰澄大師”については、名前さえ知らないまま、小学卒業と同時に鶴来町(現白山市)へと引っ越しました

以下は、泰澄大師と白山の神に関する昔話(故郷の村史より)を引用した

自身にとっての“白山さん”を描いた、2017年のコンテンツです^^ (随分昔の事のような…)

『私にとっての、白山さん(白山比咩神社)』 2017年1月

<http://ascension-hokuriku.net/2020-6-sirayamahime/2017.1.15.pdf>

白山は、日本三霊山(“富士山”・“白山”・“立山”)の一つとされ

三つの山(御前峰、大汝峰、別山)と、三つの馬場(=登拝口、加賀国の白山比咩神社、

越前国の平泉寺白山神社、美濃国の長滝白山神社)から成ります

白山信仰の総本宮は、現在“白山比咩神社”ですが

江戸時代、白山最高峰“御前峰”頂上(奥宮)の祭祀権は“平泉寺白山神社”が握っていたとされ

頂上へと続く、険しく厳しい修行の道=禅定道、その極み(頂点)が御前峰です

平泉寺白山神社を初めて訪れたのが、“アセンション”を学びはじめた年

2011年11月12日の事でした^^

自身の産土神社創始の御祭神が、“川上御前”だった事

故あって?川上御前が平泉寺に譲渡されていた事を知ったのは、その後になります

(現在は村の東西にあった神社が合体し、“上宮之廢戸豊聰耳命”=聖徳太子と“天照大神”の二柱となっています)

平泉寺白山神社の主祭神は、女神である“伊弉册尊”<sup>いざなみのみこと</sup>とされていますが、調べてみると色々不思議です?

泰澄大師を白山頂上へと導いたのは、平泉寺の御手洗池に現れた貴女(女神)とあり、その女神が

「自身は“伊弉諾尊”<sup>いざなぎのみこと</sup>である」?と名乗っていて、いざなぎ神のパートナー=男神です?

平泉寺において、33年に一度の御開帳(普段は秘仏となっている仏像などの公開)は

“白山権現”の本地とされる“十一面観音”ではなく、“川上御前”? (神仏分離令によるものと思われますが)

“神と仏”、“男性性と女性性”等、諸々がゴチャ混ぜになっていて、頭がこんがらがります(笑)



平泉寺白山神社本殿 2023.2.11 撮影

でもこれが、“神”なるものの、真の姿でもあるのではないのでしょうか？

平泉寺白山神社の主祭神は

“伊奘冊尊(・伊弉諾尊)”であり、“十一面観世音菩薩”であり、“川上御前”でもあり

本殿の扁額に記されている“白山妙理大権現”が、まさにピッタリです？！

“妙理”は、「すぐれて奥深い道理。常人にははかりしれない不思議な真理。玄妙な理。」の意

“権現”は権化(化身)の事で、私にとって、霊峰白山＝“変幻自在妙理大神秘力”?! という感じ^^  
ゴチャ混ぜなのではなく、男性性と女性性、神と仏、陰と陽の全てがそのまま在るだけ！と考えると、スッキリです  
平泉寺の御手洗池では、イザナギ・イザナミの両神が揃って、泰澄大師を出迎えたのかもしれない^^

神でも仏でもOKで、更になんとかなく人っぽい？感じの名前の“川上御前”は(あれっ、神天人では?!)

“大瀧神社・岡太神社”の御祭神でもあり、製紙の神様＝“紙祖神”と言われます

自身は、“神祖神”を感じます^^ 外ではカラスさんが、大騒ぎしてます?!

初めて平泉寺の参道を上った時の不思議な感覚は、今も忘れられません

荘厳なる、勇壮なる大舞台(大自然、宇宙)の、真ん中に立っているかのような、興奮と胸の高鳴り！

私と私の全てによって、今この時の為に、完璧に準備されていた道？！

地上セルフには意味不明の自信と確信、希望と感動で胸が一杯になり、涙がこぼれ落ちそうでした

一步一步踏みしめながら上っていた足取りが、フワフワとした無重力に変わり

まるで、“喜びの光”に手足がはえて歩いているかのような(ライト・ボディ?)地上セルフでした^^

“平泉寺白山神社”は、“イザナギ・イザナミ”両神を中心とした、これまでの白山の象徴であり

“白山比咩神社”は、両神をくくる(統合する)働きの“菊理姫”を中心とした

“新しい白山”の象徴 なのではないのでしょうか？

(今回訪れた平泉寺白山神社は淋しい感じ…何故?とっていたのですが、この事を教えてくれていたのかもしれない^^  
白山の三つの馬場は、各時代時代における大切な役割を担い、引き継いでいるのではないのでしょうか?)

以下は、石川県立博物館 Web ページよりお借りした『白山曼荼羅』(室町時代)



平泉寺松尾正覚院の什物(秘蔵の宝)とされるものです

#### 白山曼荼羅 (はくさんまんだら)

白山の神々を描いた越前系の垂迹曼荼羅である。  
最上部に日月、その下中央に御前峰、その横向かって右に別山、  
左端に大汝峰の白山三峰を雲海中に描く。  
それらに対応し次段には大宮権現(白山妙理大権現)、  
別山大行事、大己貴を配する。  
中央には児宮、三宮、加宝宮、禅師宮、金剣宮、佐羅宮の  
白山六所王子を、  
それらの下方に十万金剛童子、一万眷属、五万八千采女の  
三種の眷属を配し、  
最下部左に泰澄大師、右に臥行者と浄定行者を描く。  
裏書により 1559(永禄2)年4月、  
平泉寺塔頭の松尾正覚院の什物として描かれ、  
1844(天保15)年に修補されたことがわかる。

仏教って、曼荼羅って、すご~い！

“曼荼羅”には、宇宙の膨大な仕組みが、シンプルに、美しく、描かれているのだと思いました！

茫漠としていた白山神界が、より具体的なものとして、理解できたような気がします^^

白山権現について、もう少し詳しく調べてみました(ウィキペディアより)

	古称	本地	
三所権現	白山妙理権現	十一面観音菩薩	(御前峰)
	大行事権現(垂迹は菊理媛神)	聖観音菩薩	(別山)
	大汝権現(大己貴命)	阿弥陀如来	(大汝峰)
五王子権現	太郎王子	不動明王	
	次郎王子	虚空蔵菩薩	
	三郎王子	地藏菩薩	
	四郎王子(毘沙門天)	文殊菩薩	
	五郎王子	弥勒菩薩	

717年(養老元年)、修験者泰澄が加賀国(当時は越前国)白山の主峰、御前峰(ごぜんがみね)に登って瞑想していた時に、緑碧池(翠ヶ池)から十一面観音の垂迹である九頭龍王(くずりゅうおう)が出現して、

自らを伊弉册尊の化身で“白山明神・妙理大菩薩”と名乗って顕現したのが起源で、

併せて白山修験場開創の由来と伝わる

孤峰(別山)では、聖観音菩薩の垂迹である宰官身の“大行事権現”が、伊弉册尊の神務輔佐の行事貫主として、

大汝峰では、翁姿の大己貴命(大汝権現)が、伊弉册尊の神務輔弼として、泰澄に顕われたと伝わり、

泰澄に顕われた三神(白山妙理権現、大行事権現、大汝権現)を併せて白山三所権現と称する。

さらには白山修験が隆盛すると、白山妙理権現の眷属として五王子権現も祀られた。

**曼荼羅の上部中央に大きく描かれているのが、御前峰の白山妙理大権現 = 十一面観世音菩薩**

向かって右側、“赤い太陽”の下に描かれているのが、別山の**大行事権現 = 聖観音菩薩**

左側、“青い月”の下に描かれているのが、大汝峰の**大汝権現 = 阿弥陀如来**とあり

**大行事権現(聖観音菩薩)の垂迹が、“菊理媛神”**となっています？！

自身のなかで菊理姫は、“十一面観音”というより

“聖観音”(観音の原型)に近いのでは？という思いがあったので、やっぱり？でした^^

右側の“太陽”が女性性を、左側の“月”が男性性を象徴し、その統合が母性性であり、“新白山”という感じです

五王子権現の最後(アンカー?)には、“弥勒菩薩”の名前も見えます^^

曼荼羅の説明文にでている“白山六所王子”とは、佐羅王子(毘沙門天)、三宮王子(如意輪観音菩薩)

加宝王子(虚空蔵菩薩)、禪師王子(地藏菩薩)、金劔王子(不動明王)、児宮王子(釈尊)との説

中居大権現(天太玉命)、劔之宮(金劔宮)(彦火々出見尊)、佐良宮(天照皇太神)、

瓢ヶ嶽(倉稻魂命)、十禪師(彦火瓊々杵尊)、児権現(児之権現)(鷓鴣草葺不合尊)との説等

至る所に、様々な名前の神仏があげられていて、これ以上調べるのをやめにしました…(^);

**白山は、八百万の神々、全ての仏様が存在している、“大宇宙の縮図”なのではないでしょうか！！**

(場面を最初に戻しまして…)

右端にまします、上半身のみの仏像が、下山仏中唯一、泰澄大師自作とされる木造“**釈迦如来**”！

仏教の創始者として誰もが知っている“お釈迦さま”(ガウタマ・シッダールタ、ブッダ)です^^

自身が中学の時、家族団らんの夕食で、昨日見た夢の話をして、思わず泣き出してしまった事があります

虎にわが身を差し出して、死んでしまう男の話です

父に「それは、お釈迦さんの<sup>しゃしんしこ</sup>“捨身飼虎”の話しや」と言われ、まったくその通りでビックリしました

まだ小さかった頃、どこかで見たり聞いたりしていた事が、その時突然思い出されたのか？

過去生でブッダを知っていたのか？今の私にはよくわかりませんが

自身の中にブッダがいる?! というか、心の奥深いところで私達は皆、ブッダとつながっているのでは?と^^

外に求めようとするのではなく、心を澄まし、自身の内側深くへと入っていく事によって

∞の愛と叡知の泉“ブッダ”へとたどり着くことができる。。幻想や理想ではなく、真実なのだと思います

あらゆる真の知恵者、アセンディッド・マスター方は、そこにあり、私達の呼びかけを待っている…

その事に、多くの人が気付きはじめているのが、今という時なのだと思います^^

向かって右から三番目にましますのが、白山登山ローノ瀬に置かれていたとされる“**薬師如来**”です

薬師如来とは薬の神様、病難厄除や病氣平癒の仏様…くらいしか知らなかった私(^;)

菩薩の時に12の大願を発し如来へと至った、東方浄瑠璃世界(瑠璃光浄土)の教主であり

如来としては珍しく、現世利益も伴いながら癒し導く、より人近き仏様との事

また、薬師如来の垂迹は牛頭天王=素盞鳴とされ、昔は“牛首”と呼ばれていた白峰村の守護神です

林西寺のすぐお隣に八坂神社があり、素盞鳴命がしっかりと見守ってくれている気がしました^^

続いてそのお隣が、“別山”山頂に安置されていた銅像“**聖観世音菩薩**”です

白山は、主峰“御前峰”に、“別山”と“大汝峰”を加えて“白山三山”と呼ぶ、三位一体山

自身は、白山比咩神社に慣れ親しんできたので、神界名の方がしっくりきますが

宇宙のあらゆる全ては、根源(究極の愛の源)から生まれた、役割を持つ化身であると思っているので

私にとって神仏習合は自然な事であり、神と仏、どちらも同じように大切です

12歳になるまで過ごした故郷の村では、お寺の境内で、よく石けりをして遊んでいました^^

祭の時期になると、屋台がズラリと並ぶのもお寺の前で、わっくわくの場でした

一年に一度、たくさんの村人が集まる法事がありましたが、子供たちにとって読経はバックミュージック?

友達と大広間を飛びまわり、お菓子や郷土料理を食べたりと、楽しい思い出が一杯です^^

自身がまだ幼い頃、頭がピカピカと光輝く(髪がまったくなく、絵に描いたような)、美しい御坊様がいらして

なんと?! その頭を、撫でに行ってしまった(+o+)…みたいで

お会いする度に笑いながら、その時の話をされ、恥ずかしいやら申し訳ないやら(^; あっ、涙が。。

仏様(仏界)は私にとって、優しい祖父母のような、身近であたたかな存在として

いつまでも、心の中にしまわれています

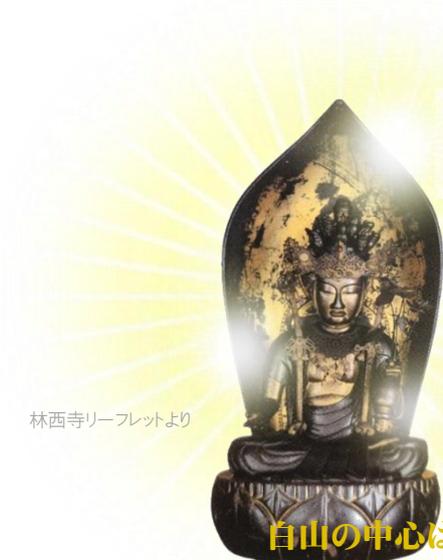
白山比咩神社のご祭神である“菊理姫”は“白山比咩大神”と同神とされ

泰澄大師が白山頂上で感得したという、“十一面観世音菩薩”であると言われますが

菊理姫のイメージはどちらかというと、様々に変化する観音の原型となった“聖観音”の方が

しっくりくる感じがしていて、今回そのヒントが見つかり、改めて自身の直感を大切にしていこうと思いました^^

観音菩薩は、地上で生きる人に寄り添い導く為に、如来(悟りを得た仏)の手前である菩薩位に留まることを選択した“慈愛の権化”であり、聖観音はそのはじまり、母体のイメージです^^



林西寺リーフレットより

舞台の中心にましますのが、白山の主峰“御前峰”頂上  
現在白山比咩神社奥宮の位置に安置されていた

### “十一面観世音菩薩”

十一面観音菩薩は、天辺に如来の顔をもち  
悟った者である“如来”面(1面)と  
悟りの手前にある“菩薩”面(10面)の両方が一緒にある  
マルチ?!な、不思議な菩薩像…

### 白山の中心は何故、“十一面観音菩薩”なのでしょう？

“大日如来”や“弥勒菩薩”だったら、ガッテン！(笑)という感じの地上セルフです^^

なんとなく、十一面観音から浮かんでくるのが、“生命の樹”—— 生命の樹といえば“カバラ”です

カバラとは、ユダヤ教の伝統に基づいた創造論、終末論、メシア論を伴う神秘主義思想。

ユダヤのラビたちによる、キリスト教でいうところの(『旧約聖書』の伝統的、神秘的解釈による)神智学であり、  
中世後期、ルネサンスのキリスト教神学者に強い影響をおよぼした。

独特の宇宙観を持っていることから、しばしば仏教の神秘思想である密教との類似性を指摘されることがある。  
(ウィキペディアより)

とあり、やっぱり仏教(密教)と何かつながりがあるようです^^

こちらは、後ほどということにして…

左から3番目にましますのが、大汝峰の頂上に安置されていた“阿弥陀如来”です

阿弥陀如来の脇に、慈悲を表す観音菩薩と、叡知を表す勢至菩薩とが並ぶ“阿弥陀三尊像”は

“愛と意志と叡知”の三位一体力の象徴であり、その中心に“阿弥陀如来”があるのは

意志(男性性、力)の時代の象徴かもしれません

東方瑠璃光浄土“薬師如来”に対して、こちらは西方極楽浄土=仏国土(浄土)の教主であり

学問を持たない、貧しい人々にも可能な称名念仏=「南無阿弥陀仏」を唱えるならば

誰もが極楽浄土に往生できるという安心感を与える事で、真の仏の道へと導こうとしたのではないのでしょうか？

「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と唱えていた、祖父母の後姿を思い出します

まだ苦勞を知らない若い頃の私には、現世よりも来世(死後の世界)に目を向けているような感じがして

仏教は、ちょっと暗いイメージでもありました

その事が、“神道”に意識を向ける、きっかけとなっていたのかもしれない^^

仏教の開祖ブツダは“諸行無常”を唱えましたが、決して現世(現実)を否定していたのではなく

常に、時空を超えた“今”=“自己の中心”にあったということが

白山下山仏の導きにより、仏教について調べてみる事で、よりはっきりと理解されました^^

慈愛の“観音”から、険しい表情の“明王”や“阿修羅”まで  
仏界とはまるで、人が想像できうる限りの人類救済部隊？であるような気がして、なんだか恐縮です  
人の思い(願望)が、その創造に深くかかわっている？ということでしょうか

左から二番目にましますのが、白山旧室堂に安置されていた、もう一つの“十一面観世音菩薩”とされ  
その当時の金銅仏としては珍しい大作の為、国の重要文化財に指定されているとの事です  
神ます霊山の頂と、人の場である室堂に、同じ“十一面観音”が祀られている事に、意味を感じます^^  
山頂にどっしりと座る、大きな十一面観音は“大宇宙”(マクロ・コスモス)  
室堂に立つ小さな十一面観音は、“人”であり、“小宇宙”(ミクロ・コスモス)なのではないでしょうか？

最後、一番左端にましますのが、白山山頂近くにある千蛇が池のほとりに安置されていた“地蔵菩薩”  
千蛇が池には、泰澄大師がいくら諭しても改心しなかった千の蛇(現代の風刺でもある?)が  
封じこめられているとされ、その見張り役でしょうか？

道端でもよく見かける、親しみ深いお地蔵さんは、釈尊入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏時代に  
衆生を救済する事を釈迦から委ねられた、大きな使命を持つ仏であることを最近になって知り、感激した私です  
地獄の番人、冥界の主と言われる閻魔大王の本地とされ、善悪・陰陽は見る側の主観でしかない事  
地上における二元性の学びの、奥深さを感じます

私達人は、自らの力だけで生きているのではなく、目に見えない大きな力に守られ存在している…

仏界もその一つのネットワークであることを思い、感謝の気持ちが溢れます <(\_)\_>

あつ?!。。。“釈迦”から“地蔵菩薩”まで(の仏界豪華キャスト?)が、壇上に居並ぶ姿は  
まるで何かの舞台挨拶のよう?!

今、**イニシエーション**?! と浮かびました

釈迦が地蔵菩薩に託したのは、弥勒菩薩が出現するまでの間の、救済の役割であり  
主役となる“弥勒菩薩”はどこに?と思った時、自身が単なる観客ではないことに気がきました!!

弥勒菩薩=自分自身であることを自覚した、私達一人一人なのではないでしょうか?

**バトン、受け取りました!!! エイ・エイ・ウオーーーーー!!!**

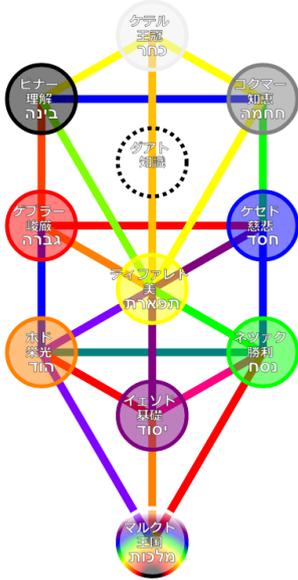


では、**何故、白山の中心仏は、十一面観世音菩薩なのか?** についてアレコレです^^

“十一面”というキーワードから連想されるのが、11のセフィラ(ダートを含む)をもつ“生命の樹”です

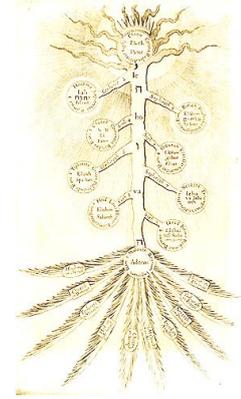
ユダヤ教の伝統に基づいた創造論、終末論、メシア論を伴う神秘主義思想＝カバラ  
 カバラでは世界の創造を、神「アイン・ソフ」からの、聖性の10段階にわたる流出の過程と考え  
 その聖性の最終的な形が、この物質世界であると解釈をする。  
 この過程は10個の「球」(セフィラ)と22本の「小径」(パス)から構成される“生命の樹”(セフィロト)と  
 呼ばれる象徴図で示され、その部分部分に神の属性が反映されている。

(ウィキペディアより)



### セフィロトの樹(生命の樹)

生命の樹は、旧約聖書の創世記に、エデンの園の中央に植えられた木。命の木とも訳される。生命の樹の実を食べると、神に等しき永遠の命を得るとされる。  
 ユダヤ教のカバラでは、セフィロトの木とも呼ばれ、宇宙万物を解析する為の象徴図表に位置付けられている。  
 ヤハウェ・エロヒム(日本語では主なる神と訳されている)が、アダムとエバをエデンの園から追放した理由は、知恵の樹の実を食べた人間が、生命の樹の実までも食べて永遠に生きる事がないようにするためであったとされる。

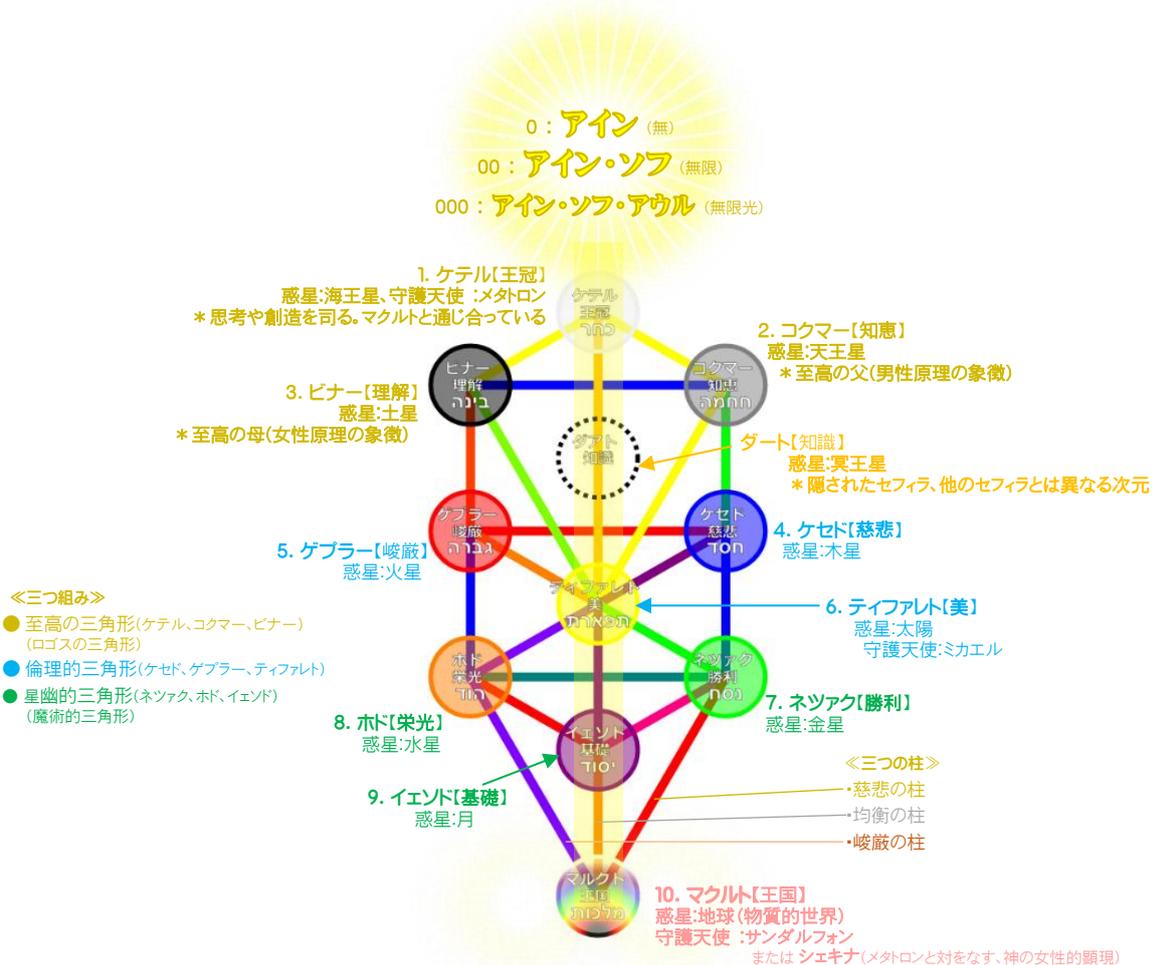


ナツメヤシを逆さまにした生命の樹  
 (ナツメヤシ=メソポタミアの樹木崇拜において、「生命の樹(木)」とされる。)

上記画像に、本文の内容を一部追記しました^^

トップに“アイン・ソフ”(光の源、根源)を描き入れると、新・“生命の樹”が動き出した?!

地上セルフの中心(魂、中心太陽)から光が溢れ、全身に喜びと活力がみなぎっていくのを感じました!



1. 十一面観音の顔(面)は、セフィロトの樹のセフィラに対応しているのでは？

頭上の三種の表情を持つ顔(各三面で計9面)が、生命の樹の3つの柱の上にある9のセフィラに

頭の天辺にある如来面が“ケテル”(王冠)に

そして、裏側に隠れている“大笑面”が“ダート”に重なって感じられます^^

“一体の仏像”=“一人の人”の中に、生命の樹が象徴する“宇宙創造”の全てがあるのではないのでしょうか？

大笑面は、表の顔(表情)を全部合わせたもののようにも、また、全てを知っていて大笑いしているようにも見え

「後ろの正面だ~あれ」=“ハイアーセルフ”(真の自己、自己の現実の創造主)が浮かびます^^

## 2. 生命の樹のトップ、“ケテル”を象徴しているのが“大天使メトロン”で

メトロンは神にも匹敵する偉大な天使であり

人間から大天使にまで上りつめた稀有な存在、“アセンディッド・マスター”であると言われます

そして一番下のマクルトは、メトロンの双子の兄弟とされる“サンダルフォン”

または、メトロンの女性性“シェキナ”とされ、ケテルとマクルトは、かけ離れたものでないことがわかります^^

生命の樹(セフィロトの樹)は、メトロンという、高度な進化(アセンション)の雛形でもあり

私達人に、その可能性を明かしているのではないのでしょうか？

## 3. 逆さまになった“ナツメヤシの生命の樹”から、神棚の“榊”(逆木)が浮かびました^^

光の源である“アイン”から、“アイン・ソフ”、“アイン・ソフ・アウル”と、∞に分かれ出た光が順に、地球(マクルト、物質的世界)へと降りてくる過程を表したものが“セフィロトの樹”であり

それは、神(光)が人の姿となって顕現する様でもあるのだと思います

神棚の“榊”(逆さの木)は、その逆 = 上昇(アセンション)を示しているのではないのでしょうか？

人が光の源へと帰っていく道、神人(人=神)となっていく道のりが“神道”であり

生命の樹の中心軸=“均衡の柱”(中道)が象徴する、根源太陽(アイン)へと向かう“太陽道”！！

地球(マクルト)と月(イエンド)と太陽(ティファレト)の統合、三位一体の先にある

宇宙の一なる光の源(アイン)、全ての生命の源“究極の愛(根源母神)の故郷”への帰還！！です^^

宇宙は、全体と中心を表す“マルテン”の形象で表わすことができ

アセンション(意識の進化、拡大、上昇)は、“マルテン(球体)”と“ピラミッド(縦軸)”で表現されます

“榊”は、頂上(神、一なる源)へと続く次元階段を表す“ピラミッド(縦軸)”のイメージ

神棚の中心にある“御神鏡”は、“マルテン(球体)”のイメージで

御神鏡は常に、自分自身(自神)を映し出し、“自己の∞の中心”=“内なる神”へと向かわせます



榊=“ピラミッド(縦軸)”

頂点(神、根源)への上昇・進化

「上にあるが如く、下にも」

御神鏡=“マルテン(球体)”

魂=自己の中心太陽=根源太陽

内なる神(根源)への回帰

「内にあるが如く、外にも」

神棚に見えるのは、宇宙?! ^^

世界中の多くの人々が、(呼び方は色々であっても)“神”=“愛”、“内なる平安”を求めている

その窓口としてあるのが、様々な“宗教”なのだと思います

けれど、開祖の心=限りなく純粋な“愛”が、そのままの姿で伝わっているのでしょうか？

宗教は戦争の道具にさえなっていて、これほど痛ましいことはありません

そうになってしまう理由の一つとして思う事

神(愛)を感じる事が出来るのは、唯一、自己の中心である“ハートと魂”だけであり

そこに在ることをやめ、外なる神(=幻想)を求めることによって、間(魔)が出来てしまうからではないでしょうか？

日本人の生活の一部となっている“神道”は、神と人との間に何も必要としない

とても自然な、人の“道”であり、宗教ではありません

日本の総氏神である“天照大御神”は、全ての人を明るく照らす、空に輝く太陽です！！

神道と共に生きてきた日本人である事に、感謝と誇りをもって

この日本から、愛と平和の輪を広げていかなければならないのだと思います^^

生命の樹(セフィラの樹)は、∞の謎解き?!のようです^^

隠されたセフィラ“ダート”についても、様々な捉え方が出来るのではないのでしょうか？

<ダートについて> 隠れたセフィラ。ダートと表記されることもある。惑星は冥王星を象徴する。

他のセフィラとは異なる次元の存在であり、至高の三角とその下位存在を隔てている深淵(アビス)にあるものとされる。

他のセフィラの完全体・共有体という説もある。

隠された意味は悟り、気づき、神が普遍的な物に隠し、賢い者は試練として見つけようとした、「神の真意」という意味である。

4. 自身がダートに感じるのは、“ハートと魂”、“ハイアーセルフ”、“愛”、“光”等で、どれも同じものと言えます^^

生命の樹の、“最後の一厘”、“仕上げ(仕掛け)の一厘”?! という感じでもあります

生命の樹を、宇宙そのものである“天之御中主大神”とすれば、ダートは“菊理姫”ではないのでしょうか?!

隠れたセフィラ = 謎の女神であり

“生命の樹”と“根源の太陽”(アイン)をつなぐ、根源太陽神界の使者、究極の愛の日女神です^^

ダート(菊理姫)が顕現することで、生命の樹 = 十一面に

“アイン”(光の源、根源の光)が加わった十二面 = “新・生命の樹”となり

十一面観世音菩薩(天之御中主大神)の本顔(十一面観音本来の顔)が遂げられる…では? ^^

5. 各セフィラには、惑星が当てはめられていて、隠されたダートは“冥王星”

冥王星は有無を言わせない、破壊と再生のパワーをもつとされ

地球規模の大変革をもたらす惑星であるようです^^

太陽系の一番外側に位置する事から、更なる未知の領域への脱皮、進化を促す星でもあるようです^^

その冥王星が2023年3月、やぎ座から水瓶座へと移動する事によって

これまで200年間続いた“地の時代”から“水の時代”への、完全なるシフトが起こると言われます

(2024年までは、まだ行ったり来たりの状態との事で、旧世界の悪だし、新世界の醸造という感じでしょうか?)

物質至上主義の時代から、魂(霊性)や個性を尊重する、全く新しい時代がはじまっていくとの事で

まさに冥王星は、“生命の樹”に新しい息を吹き込む、未知のパワー! 隠された“ダート”ではないのでしょうか? ^^

6. ダートは“知識”と訳されている事から、自身はそこに  
エデンの園に植えられたとされる、もう一本の木＝“知恵の樹”を感じます

“善悪の知識の木”とも言われ、「知恵の樹の実を食べると、神と等しき善悪の知識を得る」とあり  
また、「食べてはならない」ともあり、ちょっと矛盾している感じですか？^^

“知識”とは、単なる情報でしかなく、使い方を間違えてしまうと、身を亡ぼす道具ともなりますが  
そこに“愛”があれば、神と等しき真の知恵、叡知となっていくのだと思います！

私達は木の実を食べ、様々な二極の場(知識・情報社会)を創り出し、自己の課題に添った経験をする事で  
善悪を越えたところに存在する、“普遍(無条件)の愛”を学んできたのではないのでしょうか？^^

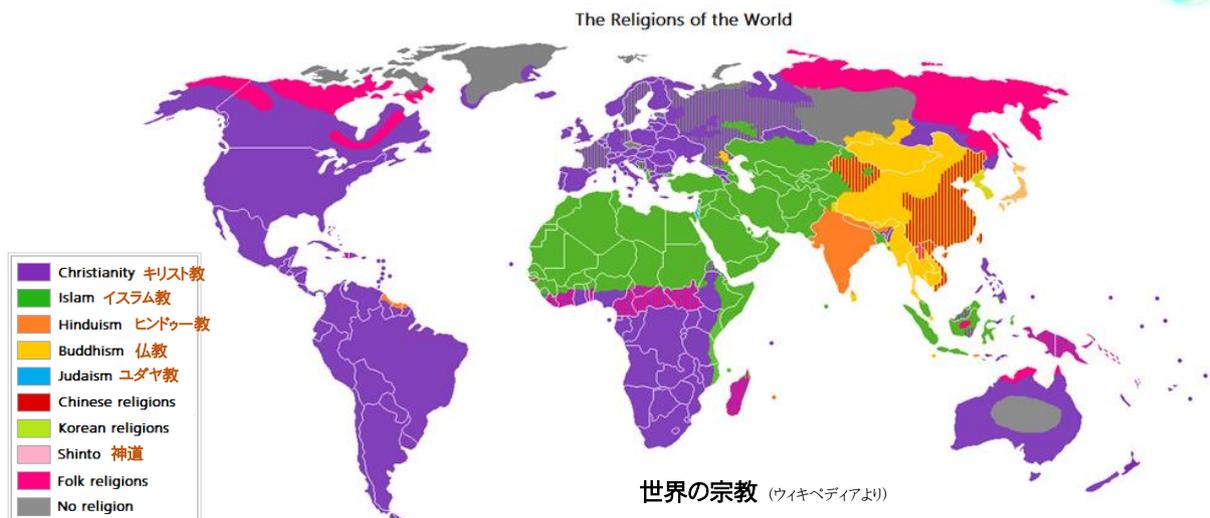
隠された意味は悟り、気づき、神が普遍的な物に隠し、賢い者は試練として見つけようとした『神の真意』

“十一面観音”は、∞の創造の可能性(新・真“生命の樹”)  
＝“白山”では？ \*^^\*

(“カバラ”は“迦波羅”＝影の陰陽道、カラスさんでもありました！)



世界の宗教について、簡単にまとめてみました！^^



### 《世界三大宗教(世界宗教)》

・**仏教**(約5億人)…紀元前5～6世紀頃、インドの“釈迦”が創始

・**キリスト教**(約22億人)…1世紀(西暦はイエス誕生を1年とする)、パレスチナの“イエス・キリスト”が創始

・**イスラム教**(約18億人)…7世紀のはじめ、メッカ(サウジアラビア)の“ムハンマド”が創始

更に以下の二つの民族宗教をプラスして、《世界五大宗教》と言われます

・**ヒンドゥー教**(約11億人)…紀元前3世紀頃？インドにはじまる

紀元前15世紀頃？に誕生したバラモン教を前身とする、多神教(ブラフマー、シヴァ、ヴィシュヌ等)

・**ユダヤ教**(約1,500万人)…紀元前20世紀(13世紀)頃？古代イスラエルにはじまる

ヤーウェを唯一神とするユダヤ人(アブラハムの子孫)によって伝えられた

キリスト教、イスラム教、ユダヤ教は、アブラハムを最初の預言者とするため、アブラハムの宗教と呼ばれ

エルサレム(イスラエルの都市)は、3つの宗教の聖地となっている

何をもって、その宗教のはじまりとするのか？が曖昧のようで、起源についてはよくわかりません(^\_^;

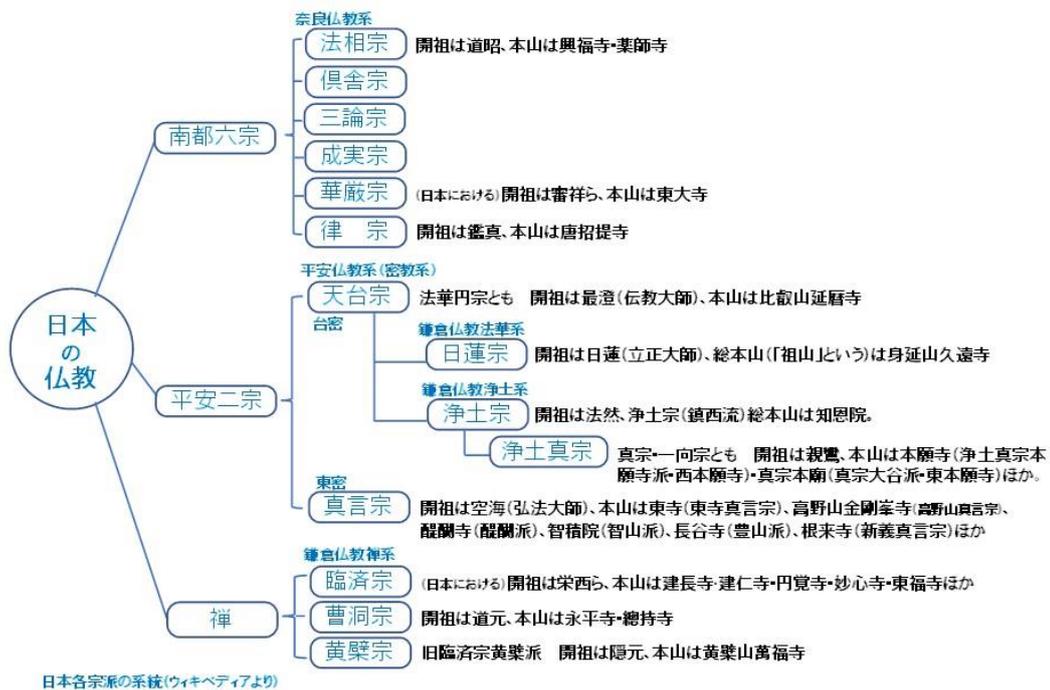
文化庁によると、日本人の約51%が“神道”、43%が“仏教”、1%が“キリスト教”との事です  
 個々の宗教についてみていくと、次から次へとリンクする＝疑問と興味が膨らんで  
 帰ってこれなくなる…(笑)、簡単にまとめられるようなものではないことがわかりました  
 ほとんどの宗教の開祖の願いは、その時代とその民族の実情にマッチした“愛の教え”を説き、広め  
 実践していく事であり、純粋で尊いものなのだと思います

やむにやまれず何かを強く主張すれば、必ずそれと反対のものがでてくる。。

対立による学びを繰り返してきたのが、これまでの人類史であり、もう卒業の時がきたのだと思います^^

キリスト教には大きな“愛”を、仏教には深い“叡知”を、神道には大いなる“道”を感じます

今回訪れた林西寺は、真宗大谷派とあり、日本の仏教を整理してみました



タイトルだけですが(笑)、日本だけでも13宗56派あるとされ、その奥深さはどれほどのものでしょう？

釈迦が生まれてすぐに発したとされる、『天上天下唯我独尊』(てんじょうてんがゆいがどくそん)

この言葉から、自身が感じるのは

「天の上にも下にも、唯ただ我われだけがあり、たった独りが、この上なく尊い」で

“我”とは自分という一人称ではなく、ブッダの悟りの境地＝“すべてが一つとなったワンネス”を指し  
 その一部分である個＝一人も、あらゆる全ての可能性をもつ“たった独り”であり、他と比べようもなく尊い

“ミクロ”と“マクロ”が重なりあう、∞の広がりを持つ宇宙を感じます^^

ヤーウェの「在りてあるもの」、「全てであり、全てでないもの」と同じ言葉ではないでしょうか？

お釈迦様の数あるエピソードの中で、特に印象深く残っているのは

悟りを開くきっかけとなったとされる、村娘スジャーターとの出会いの場面です

釈迦は、6年にわたる生死の境を行き来するような激しい苦行を続けたが、

苦行のみでは悟りを得ることができないと理解する。

修行を中断し、責めやつすぎた身体を清めるため、やっとの思いで付近のナイランジャンナー川で沐浴をした。

スジャーターの下女ブンナーは樹下に坐していた釈迦を見て、樹神と思い、スジャーターに知らせた。

すると、スジャーターは、喜んでその場に赴いて、釈迦に供養した(乳粥供養)。

釈迦は、スジャーターから与えられた乳がゆを食して、ナイランジャーナー川に沐浴した。

生死の境を行き来するほどの、厳しい修行の道のりは、どれほど苦しかった事でしょう！

だからこそ、どれほど嬉しかった事でしょう！！

命をつなぐ一杯の乳粥と、そこに込められたスジャーターの真心——

∞であるかのように感じられていた闇に、光が差し込み

**仏陀の中の生きる力＝“魂の光”が、再び輝きを取り戻したのではないのでしょうか？**

人の真の姿は、永遠の魂(光)であり、その本質である“愛”や“喜び”が見いだせなくなったら

進化(悟り)の道も、閉ざされてしまうのだと思います

やせ細ったお釈迦様の姿は、衝撃的です(；\_；) 仏様はみんなふくよかで、よかったです！^^

仏陀が、56億7千万年後の世界に出現を預言したとされる“**弥勒菩薩**”＝仏教と思うのですが

“**マイトレーヤ**”という、キリスト教がイメージされるのは何故かしら？私だけでしょうか…

その理由を調べてみると、マイトレーヤという名前は

クシャーナ朝(1～3世紀ころ。イラン系民族が北西インドに建てた王朝)における太陽神“ミイロ”に由来し

ミイロは、イランの太陽神“ミスラ”に、そのミスラは“ミトラ”につながっているとの事。。“**ミトラ教**”とは？

ミトラ教またはミラス教は、古代ローマで隆盛した、太陽神ミラス(ミスラス)を主神とする密儀宗教である。

ミラス教は古代のインド・イランに共通する、ミスラ神(ミトラ)の信仰であったものが、

ヘレニズムの文化交流によって地中海世界に入った後に、形を変えたものと考えられることが多い。

キリスト教が国教となる(4世紀)前までのローマにおいて、ミトラ教は大きな力をもっていたと言われます

現在キリストの誕生日とされる“**クリスマス**”(本来は、キリストの誕生を祝う日)は

ミトラ教における“**太陽の復活を祝う日**”(冬至以降、太陽が出る時間が長くなっていく為)だったのですが

ミトラ教の衰退とともに、忘れ去られていったようです

古代インド・イランの“太陽神ミトラの復活”が、仏教における“弥勒菩薩の出現”となり

キリスト教の“イエス降誕(復活)”にもつながっているのではないのでしょうか？

仏教もキリスト教も、どちらも“太陽神の復活！”が、その願いであり、その答えは日本にある!!では？^^

キリスト教やユダヤ教徒でなくても、“アブラハム”や“モーセ”(モーゼ)などの大預言者

“ヤコブ”とその子孫“イスラエルの12支族”といった言葉に、反応してしまうのではないのでしょうか？

その度に調べては、すぐに忘れる(笑)、そんな感じだったので

今回は、ネットを参考にさせていただいて<\_> “イエス・キリストの系図”という形で

それらのつながりを書き出してみることにしました^^ (頭の中スッキリ!)

取り掛かって不思議だったのは、面倒…ではなく、楽しい～？と感じた事

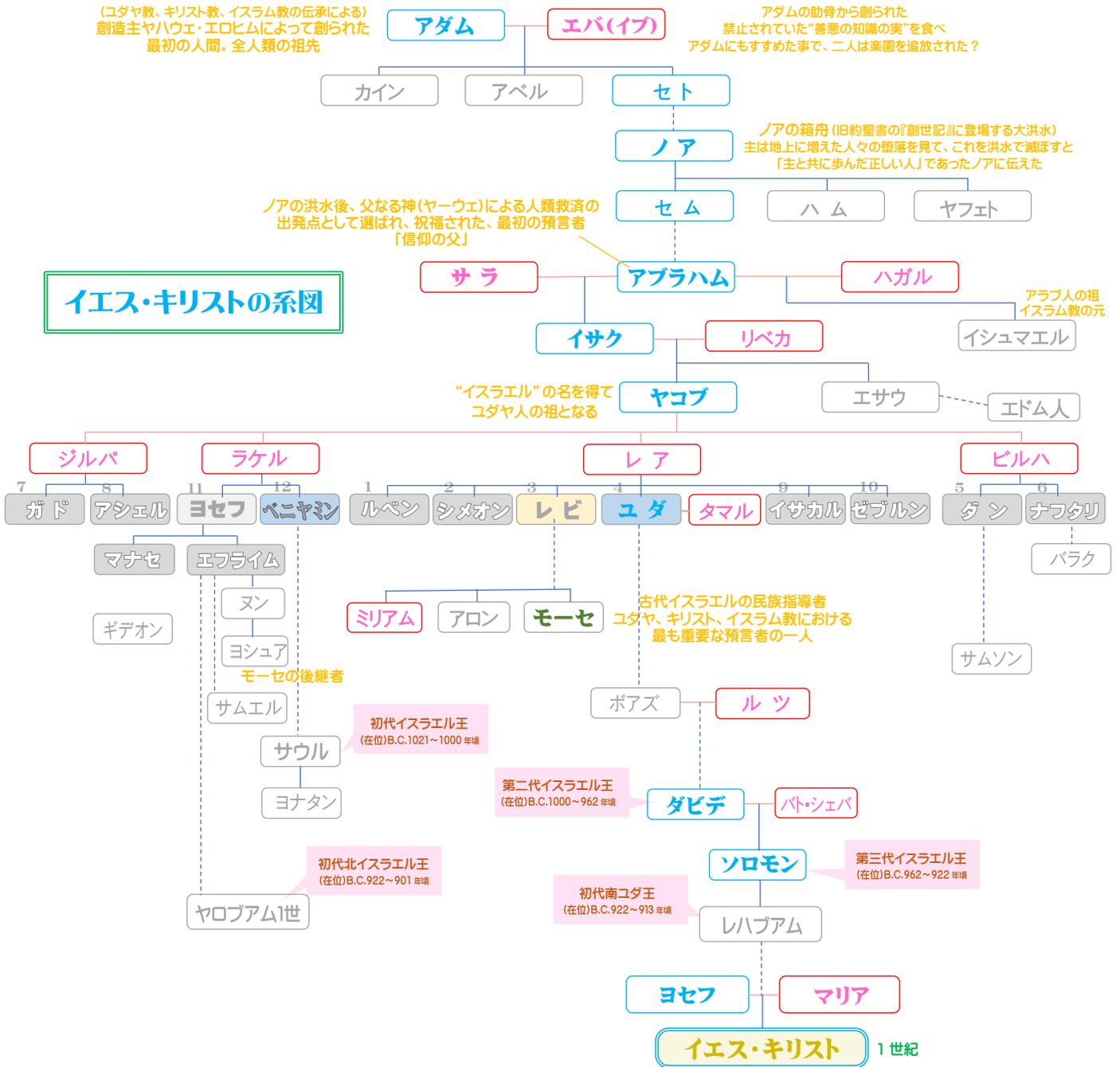
図形の描き方とかは独学(要領悪し^^;)なので、めちゃくちゃ時間がかかってしまうのですが

それ以上に、仕上がっていく事が嬉しい！ワクワクする？気持ちが上回っていて、何か理由があるのでは？と

もしかしたら私もこの中の、ある時代の一人として、生きていたのかもしれませんが^^

今地上に生きている人は、様々な時代、人種を選んで生まれ変わり、進化の学びを続けてきたとされ

**イエス・キリストの系図は、私達自身の系図でもあるのではないのでしょうか？**



系図全体をみて、最初に感じたのは

これまでの私達の歴史は、“父なる神”によって導かれていたのでは？という事です

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の創始者とされる“アブラハム”は

唯一神(ヤーウエ)を“父なる神”と表現しています

父(父性)が決して悪い訳ではありませんが、母性があまり感じられないのは何故？不自然な気がします

父も、その母から生まれるのであり、究極の源は“母性性”です^^

旧約聖書『創世記』の中にあるとされる、下記の言葉。。

「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。

あなたの名は、祝福となる。———」(ウィキペディアより)

私には、母なる神の声に聞こえます^^

ちなみに、若い頃のアブラハムは「アブラム」と名乗っていましたが、「ハ」には“多くの民の”という  
意味が込められていて、彼の子孫繁栄のために、神が直々に改名されたのだとか^^

アブラハム？  ですよ！

また、自身がこれまでどうしても納得がいかなかった逸話として  
アブラハムが神に忠誠心を示す為、ひとり子イサクを捧げようとする場面があります  
神が、「我が子の命を捧げよ」などと言うのでしょうか？？  
その時アブラハムの行為を止めようとして現れた天使こそが、アブラハムを導く真の神だったのでは？と  
ユダヤ教以前の宗教に、何かヒントがあるかもしれないと思い調べてみると  
ゾロアスター教やミトラ教につながりましたが、こちらを調べれば調べるほど複雑怪奇？となり  
混乱し、気分が塞いでいくのを感じました(^;

何故なのか？それは知識や情報という、自身の外側に答えをみつけようとしているからで

**“神”＝“愛と光”は、そこにはないからなのだとわかりました**

宗教について調べる中で、人類の祖とされる“アムンナキ”という存在にフォーカスされました  
アムンナキは自分たちの惑星であるニビルを永続させる為に、金が豊富に存在していた地球へと降り  
その奴隷として生み出したのが、人類の祖、アダムとエヴァ(イブ)であった？というものです

以前の私なら、そんな馬鹿な事があるか！で終わっていましたが。。

地球外にも様々な生命体があることを理解した今(意識の進化・拡大＝アセンションでもありますが…)

ちよつと、かなり、ショックでした(^;

アンやエンリル、エンキ、イナンナ等と呼ばれる神々は、よく目にする名前であり、気になります…

ですが、自身にとって神とは何だろう？と考えた時

**“愛”と“光”であり、“喜び”であり、それ以外のものではありません！！**

もしアムンナキが、真に奴隷という目的で人類を創造したのであれば、それは私にとっての“神”ではなく  
私達と同じ進化の途中段階にある、知的生命体(宇宙人)だった、という事になります

私達人は、決してアムンナキの奴隷として誕生したのではなく

アムンナキもまた、地球における人類進化の、一過程に関わることを“神”から許された宇宙ファミリーであり  
一なる根源(神)から生まれ出た、同じ神の子なのではないでしょうか！

(エンキは偉大なる科学者であり、人類のDNAを復元し、サポートするために帰ってきた？とも^^)

神話に登場する神々の多くが、もしかしたら、私達の単なる想像上の産物だったり  
進化のレベルが違いすぎる為に“神”と呼ぶしかなかった、未知の生命体であるのかもしれませんが

**私達は、これらの古い神々を越えていかなければならない！**

アセンションを決めた地球(ガイア)は波動を上げ、それと共に在ろうとする人類には

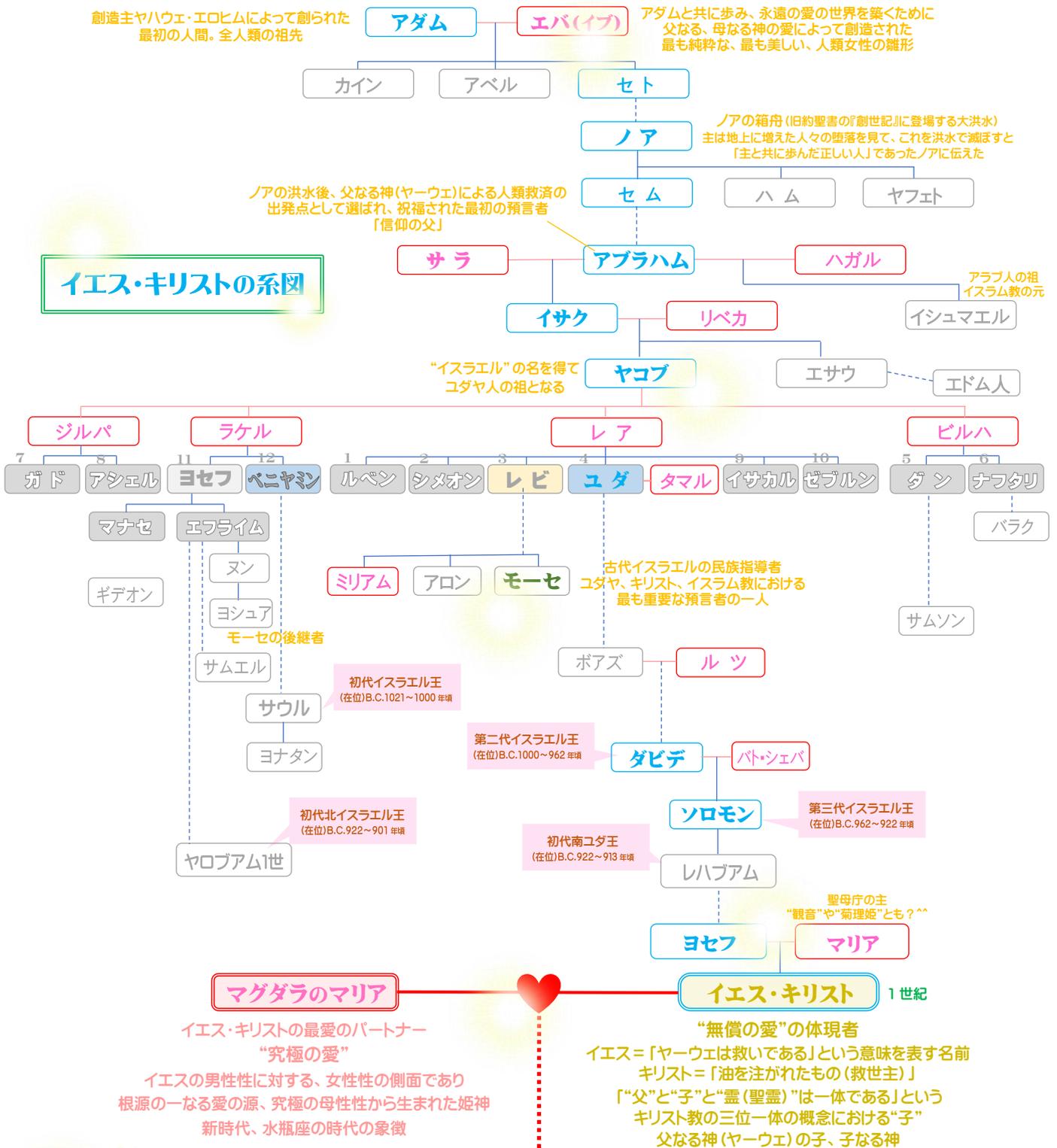
ボールをはがすように、宇宙の真の姿が見えてくる ——

そこは、私達の想像を絶する世界であり、多くの人が混乱する中で

**決して消えることのない“希望の光”が、私にとっての“神”ですよ！^^**

イエス・キリストまでたどり着いて、どうしても足りない気がする(つづきがあるはず)。。。で、  
系図に書き入れてしまったのが(笑)、イエスのパートナーとされる“マグダラのマリア”です^^

(謎のワクワク、喜びの答えだった?)



21世紀(現代) 父なる、母なる、神(愛)の子供 = **新人類(神人類)**

※エバ、マリアについて(中今で)、追記・訂正しました!^^v

パチパチパチパチ ~ ~ ! !

“イエス・キリスト”と“マグダラのマリア”は

“饒速日”と“瀬織津姫”と呼ばれる、日本の神々の事でもあり、二神が揃って立つことは  
魚座(物質中心、縦型社会)から、水瓶座(霊性中心、平等・共栄社会)の時代へ  
男性性中心から、両者の統合の時代への、明確な移行を象徴しているのではないのでしょうか？

新しい地球に生きる私達は、二神の子供であり、調和された精神をもつ

新人類 = 神人類 ^^

神人類とは、“神(天)人”の事で、地上の人に、天界(仏界)・神界の全てを統合した、マイクロ・コスモス！！

地球は、ず〜っと私達を支え、見守ってくれていた宇宙ファミリー(宇宙高次の存在)

そして神々のすべてが一つとなって、新しい宇宙(NMC)を創造していく場

NMCの核心である **根源太陽** = “**根源天照皇太神**” まします、**皇の星“地球”**です！

ユダヤの12支族と呼ばれる、ユダ族とベニヤミン族からなる南ユダ国

残りの10支族からなる北イスラエル国、祭祀族であるレビ族の全ての民が

日本へとたどり着いたとされるのが真実だと、自身は思います^^

何故ならば、ここ“日(=太陽)の本”が世界の中心であり、“すべての故郷”だからです

日本の皇祖神として、(伊勢)神宮内宮に祀られているのは

中今(過去と未来 = ∞の時空が、同時にある今ここ)

**根源の究極の愛の太陽 “根源天照皇太神”**であり

その分御魂(分身、子供)である、“饒速日”と“瀬織津姫”であり

“イエス・キリスト”と“マグダラのマリア”なのだと思います^^



外宮は、この新しい世界の“芽”とも言うべき“愛の核心”を支える、“究極の神聖”であり

“神の中の神”であり、外宮がなければ、内宮も存在し得なかった——

それをなんと呼ぶのかは、人それぞれであり、ただ、熱い思いが込み上げてきます

—— それらのすべてが“白山”にある ——



白き神々の座

ありがたき故郷 “白山”



私達の“ハートと魂”の中心から、

全宇宙に ∞の愛を！！

2023. 3.31 皇美・流美